

ことばの発達と言語障害



田 口 恒 夫

私はことばの発達、特に生まれてから一年から一年半ぐらいまでの小さい赤ちゃんが、ことばを覚えてくるプロセスにいちばん関心をもって見ております。

話す動物

人間は話をする動物で、たいへんよくしゃべります。私たちが調べたところ、おとなで、一日に、三十分〜二時間位、個人差はありますが平均して一時間と二時間のあいだぐらいしゃべっています。そのしゃべる時間というのは、直接に声帯が動いて声が出ている時間だけを正確に測りました。おもしろいことに、たくさんしゃべる人ほど、自分は、あまりしゃべっていないかのような気がしている、そして比較的無口な人ほど相当しゃべっているような気がしているらしいのです。女子は男子よりよくしゃべるとか四十歳を過ぎると急にそれが多くなるというような偏見を持つ

ている人もいるようですが、その点は、まだ十分に確かめられていません。いずれにしても、非常に長い時間、声を出す動物です。一日のうち相当長時間声を出している動物に鳥もいます。雀はたいへんおしゃべりだといわれますが、測ってみることできれば、日常生活のありのままを客観的に計測したら、おそらく人間ほどに、さえずらないのではないかと思えます。

さえずる動物

雀は竹やぶなどでさえずっていますが、何のためにあんな声を出しているのかというと、鳥の専門家でないのでよくわかりませんが、多分、たいしたことは言っていないのではないかと思えます。というのは、鳥は、声を出すことによって、相手に何らかの情報を伝達するということはなきそうで、ただ、ピーチク、パーチクとやっているらしい。「そういうのは『さえずる』というの

であつて、人間のことばとは、基本的に違ふのだ」とがんばる人が非常に多い。「鳥はしゃべっているのではない。人間は意味のあることばをしゃべっているのだ」と思う方があるかもしれませんが、その点で人間がしゃべっていることばというのは、どういふ働きを持っているのかということをよく考えてみますと、意外にこれが、意味のないことが多い。この場合、意味のあることばというのは、伝達の目的を達するということですが、ことばは、人にある情報を伝達するのに使う道具である、一種の暗号体系であると言われますが、もしその意味で、意味があるとしみますと、皆さんのしゃべっていることばは多少とも、何らかの情報を相手に伝達する、即ち、伝達目的を果たしているものでなくてはなりません。それが、人間の人間たるゆえんで、そうでないのなら、おそらく雀がさえずっているのと同じになります。「基本的に私たちは人間で、小鳥とは違ふんです」というなら、「違ふ」と言うからには、先生のおっしゃっていることは、いつも、なんらかの情報の伝達に役だっているのですね」といわれると、よく考えてみると、案外そうでないことが多いのです。

情報の伝達

実際に情報の伝達に役だっていることばはたくさんあります。仕事の上では、そういうことばをたくさんお使いになつてゐることと思ひます。「〇〇先生、電話ですよ」とか「お台所で、なに

かこげてませんか」とか「〇〇ちゃん、地面に腹ばいになつちゃだめですよ」とかいうのは、ある種の情報を相手に伝えていふから、情報の伝達になつています。ところが実際に人間がしゃべっていることばの何割ぐらいが情報の伝達に役だっているかといふと、役だっている方が、むしろ少ないのです。

気持ちの表現

「ああ、やんなつちゃうね」とか「また曇ってきたわ」といふのは、その内容はいわれなくても大部分の人はすでに気付いていることです。だから「あなた（ご存じないでしょうけど）ホッペタにごはんつぶつていますよ」という相手に重大な情報を伝達するのは大変ちがいます。「また曇ってきた」「あーいい天気だ」「いい気持ち」「〇〇先生おはようございます」といふのは、むこうでも朝食を食べて出てきたばかりで朝だということを知っているのですから、時計でも指さすとかすれば情報の伝達としては、言わなくても済むわけです。もっとひどいのは、自分の足の上に、はさみを落として、「アイタタタ」と言う人がいますが、そんなことは、自分が痛いのであり、その原因を作つたのは自分ですし、なにも隣りにいる先生には関係ありません。それをいちいち「アイタタタ」と言う必要はないし相手にせひ伝えなければいけない伝達の理由もない。私どもがしゃべっていることばの大半は伝達目的というよりは、なんとなく自分の気もちを表わすた

めに使っているのが多い。ことばというものは、そんなものです。「あの子の父親は学校の先生だぞうです」と相手にいう時はある情報を伝達していますが、「おはようございます」「いらっしゃい」「さようなら」というあいさつことばは、ほとんど情報の伝達としては、役立たない。その点からすれば、かばんを持って帰って来ただんなさんに、「おかえりなさい」という必要はない。帰ってきてそこに立っているのに「ただいま帰られましたか、なるほど」と感心してから、家に入れることもないし、「いっていらっしやい」についても同様です。行く気になったから、そこに立って出ていこうとしているのですからその上重ねて言う必要はありません。もし情報の伝達のためにだけことばがあるのなら、われわれのしゃべっていることばのほとんどが情報の伝達としては無意味に近いことばですから大部分はむだです。でも実際は、人間はさえずる動物で、そういうことをさえずって一日暮らしています。公衆電話で三十分以上話して、要するに、何が伝わったかといえ、〇〇さんは、本当は、あの人好きじゃないらしい」という気持ちを伝えたとか、そんなことなのです。そういうことだったら、電報でひとことで済むようなことなのに済まないのが人間の常で、ことばというのは、そういうふうに使われているもので、ひょっとすると情報の伝達と同じくらい、そういう機能は大切ではないでしょうか。どうしてかという、情報の伝達については皆さんよくその大切さを存じと思えます

が、そうではない、自分の気持ちを表わすとか、自分の感情を表わすとか、気晴らしになにか言うとか、「ああやんなっちゃったな全く」ということの意味というのは、一つは、その人の気晴らしになること、もう一つは、それらを言うことによって、お互いに相手にそれとなく、自分の「気持ち」を伝え、相手との「気持ちのつながり」を確認しているのです。「おはようございます」といつものように言うことは、「私としては昨日と同じような気持ちで、あなたを私の仲間として認めています。だから突然後から短刀でさしたり致しませんので、特別の警戒をすることも不安を持つこともありません。いつもと同じです」という気持ちを暗に相手に伝えるためにしているのではないのでしょうか。だんなさんが帰ってきた時、「おかえりなさい」と言うことは、「帰ってきたら、ひとつなんとかしてやろうと思っただけです。あなたという気もちではなく、「いつもと同じなんです、あなたと同じ家族の一員として例のごとくあなたを迎える気持ちです」ということがそれを言うことによって伝わるのです。

ことばの機能障害

ことばというのは情報の伝達だけでなく、そういう役目を果たしているのも、もしことばがうまくしゃべれない、または、しゃべるのがおっくうだったり、口べただと思っただけのために言うべきことを言いたがらなかったりすると、情報の伝達ができない

めに困るよりむしろ、気持ち伝わらないような感じがします。

そういうことはふだん雀以上にさえずっている人にはとても想像がつかないことかもしれません。明日から突如さえずることは止めて、意味のあることだけを言う、情報の伝達上重要な意味を有することだけを端的に言って「無駄なく短く」と公衆電話ボックスにある標語のようにすると、電話がくれば「〇〇先生、電話です」と電話と先生を指さすとか、ごく単純にしてくだらないことはいっさい言わない。「おはようございます」「いいお天気です」と、というようなことは全て言わない。皆のわかっていることはいちいち口に出さなくてもわかっているで口に出さない。「おはようございます」と言われれば、黙ってニコリとうなづくと言わない。受けるが言わない。「今何時」と聞かれれば、「八時三十分」と答えるが、情報の伝達上無意味なことはいわない。そんなことを三日も実行しますと、まわりの人が、「あの人はよほどなにか悩みごとがあるにちがいない」とか「たぶん困ったことになってるにちがいない」「誰かをうらんでいるのではないか」とかいろいろと心配をしてくれます。それでも頑張っていると、もっともっと重大なことになってきます。ひょっとすると、皆さんは、今の職場を失うかもしれません。

そして、自分は無駄なく簡潔で、最も能率的な人間なのだから、もっともっと高給で誰か雇ってくれていいはずと思われるかもしれませんが、どこへ行っても、おそらくそれは通じないでし

よう。その意味で、ことばが、うまくしゃべれない、無駄ばなしが普通にできないということは、非常に重大な問題なのです。

二ことばの適応

地球上に住んでいる人間の大部分は、黙っているのが困難だからしゃべるのです。何かしゃべっていた方が、気が楽だからほとんど相手のいうことを繰り返している人もいます。そして、そういう人は、だいたいにおいて、適応がいいといわれます。「いいお天気です」と園長先生が言ったら、「ハーいいお天気でございますね」というのです。「空が晴れますね」に対して「本当によく晴れていますね」そして「うっとうしいみたいです」ね」に対して、そういえば、少し、うっとうしいみたいです」というのです。一般的にたくさんしゃべる人ほどまわりの人との適応がいいとされています。これも有用なコミュニケーションをしているのではなく、無駄なこと（ことばの冗長性といわれるのですが）をたくさんしゃべっていることが大切なのです。とすれば、しゃべれないことは、非常に困ることです。

二ことばの障害

今もしかすると、皆さんの幼稚園にあまり満足にしゃべれない子がいるかもしれません。しゃべれなくても、どうも困っているようすもないし、先生としても、子どもがしゃべりさえしなければ

ば、大変静かですし、まあ結構だわいと思っていらっしゃるかもしれません。その人が、そのままずうっと、一生を終わっていくうちには、そのためには、いろいろな目に合うことになりがちです。それで、その意味で、ことばは、皆さんと関係がないわけではなく、関係がたいへん深いし、保育の内容にだって、言語なんているのがあるくらいですから。

人間がことばをしゃべるといことは、空気みたいなこと、息をするような、あたりまえなことです。誰でもしゃべる。本当にしゃべれない人は、一〇〇人に一人もいない。全くしゃべれない人は一〇〇〇人に一人もいないくらい少ないのですから、人間というものは、皆しゃべるものだと思っている人が多い。それで当然のことだと思うのです。あまりあたりまえのことなので、ことばというものが、どういうものかということ、ことばの驚異ワンダーということ、ことばというものがワンダフルなものだということを含みがあります。

実際大部分の人にとって、ことばのことなんか考えなくて、すむのです。ちょうど空気のことを考えなくて済むように。明日の空気をどうしようかななんて考えなくていいのですから。たいがい前からずうっとありましたし、多分明日だってあるでしょう。死ぬまで空気が薄くなってそのために、自分が苦しむということはありません。だからつい、空気のことばは考えませんし、「人間が生きていく上の、酸素の重要性」という話を聞き

にくいこうなんて、あまり思いません。それと同様、人間が生きていく上のことばの重要性は、つい忘れられがちですが、あまりあたりまえなので気が付かないことなのですが、ことばに関してはいふんかわった不思議なことが、たくさんあります。

ことばの習得

その、はなしことばの特徴的な面を、一、二紹介しておきましょう。

一つは、ことばというものはいつでもひとりで育ってくるのではなく、やはり、人に教わって習って覚えて身につけるものだということです。その点では、自転車に乗れること、泳げることと似ています。習ったことのない人にはできません。皆さんがホッテントット語がしゃべれないのは、そのためで、人種がちがうからではありません。習ったことのないことばはしゃべれないのです。

音 声 器 官

もう一つのことばは、しゃべるには息をします。のどを鳴します。口の中でバクバクという発音のことをします。唇を動かしたり、舌を動かしたり、ですから発音器官というものがあるって、そこが動いて、そして、ことばという音がどこか、この辺のスピーカーから出てくるものと思っっている方が多いかと思いま

す。しかし、よく考えてみますと、もともと、発音器官というものはどこにもありません。息をするのは、生きていくためにするのであり、しゃべるためではありません。しゃべることより息をする方がやはり先です。本当に息をしなくてはいけない時には、しゃべれなくなりません。ゴールインしたばかりの一万m競争の選手をすぐつかまえて、「優勝のご感想は？」と聞いても、きつと「ハッハッハッハッ」というばかりで、おそらくあまりことばなんか出てきません。息をする器官がひまな折に借りて、しゃべっているのをして、発音器官というのはないので。

舌もそうではありません。舌はもともと、食物を食べ、かんで、飲みこむのにあります。赤ちゃんがおっぱいを飲むためにある。それを、お手すきの折借用しているのです。もともと発音器官という専用器官はなく全部借りものです。しかも貸し主の方の主な働きは生きていくのに重大な関係がある。食べないと生きていけませんけれど、しゃべらなくても死にません。二、三ヶ月だつてだまっけても決して死ぬことはありません。何年もの間一言もしゃべらずに生きていた人もあるのですから。

生物学的に生きていくためには、何もしゃべらなくてもさしかえありません。生きていく上に余裕があり、即ち今すぐ食べなくても酸素を吸わなくても死なない状態であり、心身ともに余裕のある時しか借用できませんから、余裕のある時しかしゃべれません。ですから、皆、一杯飲んでごちそうを食べてせんたくも皿

洗いも済んだ時よくしゃべるのはそのためです。

発音動作

もう一つおもしろいことは、しゃべるといふ動作は皆ができるということですが、「お茶の水女子大学」といってごらんなきいと言いますと、すぐ一度で言えます。これは大変なことなのです。ちょっと詳しく説明したら、びっくりしてしまうかもしれませんが、どうしてそんなことが自分にできるのだらうと思うくらいすごいことなのです。どうしてかといえますと、一秒間のうちに五回も十回も違った運動を口の中でします。しかも、それが一mmの狂いもなくタイミングからいいますとμ秒ぐらいまでの正確さです。それ以上狂うと、人は、おかしいといえます。「おーちゃーのーみずー……(ゆっくり)」なんて言いますと、非常におかしいといえます。どこがおかしいといつたつて、それは、ほんの少ししか、おかしくないのです。ほんのμ秒でするところをμ秒でやったということか、舌をこのへんにくつつけるのを○・五mm前にやったとか、そのくらいのは、かんべんしてくれてもよきそうなのによつとの違いも許さない。しかも「お茶の水女子大学」と言う時に、途中で二回だけ鼻の裏門を開けて、息を鼻から出すのです。ひとつは、ローマ字で書くと、"m"水のミの音のところがそうですが、全く正確なタイミングで、その時に鼻から「フー」と出るので。

今では、機械を備えて、いつ、何ccの空気を鼻から出したかというものを測ることができますが、そうしますと、一人の例外もなくちょうど、その時に鼻からフーと息が出る、その他の時には鼻の裏門をきちっと閉めていて、少しも息が出ない。「あなたは、どのようにして鼻の裏門をおしめになるのですか」とか「その時のこつを教えてくださいだきたい」とか「なんで、お茶の水の中で二回だけそこを『フー』とあければよいのですか」とか聞かれても、本人が一番わからない。「イヤ、それは知りませんでした。私は、そんなことをやるとは、とても」なんて言います。そのしゃべっている時に横からレントゲン映画が撮れます。その人に舌がタカタカタカと動くのを見せて、「今あなたがやりになったのはこういう運動です」といい、そしてもう一回やらせました。同じふうに動くのを本人が見て腰をぬかすほど驚きます。「自分はそんな上等なことのできる人間だとは、今まで気がつかなかった」ただ普通にやっていたので気づかなかったのですが、同じ人に同じように英語とかロシア語をペラペラとやってごらんなさいといえますと、もたもたして、ジスイズアー ウー……なんて全然だめです。今、日本語が普通にしゃべれるというのは、猛烈な学習をして、なんだか知らないけれど人間のやる動作で最も敏捷で、最も微妙なことをやっています、全く自分ではわからないのです。

無意識の動き

「お茶の水の茶という時は、舌をどの辺につけていますか」といわれると、「私はこの辺です」とよくわかっている人は、よほどひどい言語障害ですぐ障害の専門家にみてもらった方がいい人か、または音声学の専門でその方の実験をしている人ぐらいです。普通の人は、そんなことはわかりません。だから全く無意識にやっている種類のことだということです。しかも、その場合意識して、「どうも、お茶の水の茶をいう時、舌が後へつきすぎかげんですからこれから気を付けて、ほんの少し、そう、一cmのぐらい前歯側に移しておやりなさい。ぜひそのようにお気をつけておやりなさい」といわれたら、どうなるでしょうか。ものを言う時ごとに、ひよっとするとチャの音が出てくるのではないかと思ひ、「あのおー（一テンボおく）茶の水」なんて言って、ただそれだけでも普通にはしゃべれなくなってしまいます。

意識するまでなくなることには、ほかにもいっぱいあります。たとえば、落ちると死ぬようなところで、一枚の板の上を歩けといわれますと、足がすくんで歩けなくなります。「あなた歩けなかったんですか」なんて言われて、「いやそうじゃないんです。歩けないわけじゃ決してありません」「歩けるのなら歩いたらいいでしょ」といわれても、幅八〇cmぐらいのところを歩くことはすぐできますが、これが一〇〇mも上のほうにいけますと、同じ幅

が歩けなくなります。落ちると死ぬという気がするのです。普通にやればいいのですよといわれても普通にやれなくなるのです。というのは、決して失敗してはいけないといわれると、もう普段やっていることが―無意識にうっかり歩いてましたから、右足出して次は左、その次は右を出せばいいのですと言われても、そんな単純なことが―意識させられるとわからなくなる性質があります。しゃべることも、そういうことなのです。

幼児のことば

皆さんぐらいう何十年もしゃべっていますと、ちょっとのことでは驚かないかもしれませんけれど、幼稚園の子どもはまだ、しゃべりはじめてから三年から五年しかたっていないせんから、その時に、もう少し舌を前につけるとか、もっとはっきり言いなさいと言われますと、ちょうど一〇〇m上の板の上を「十分幅がありますから心配はいりません。さあ歩いて下さい」と言われた時のようになります。そしてどもり始める子どもがいいるとはかぎりません。

発音の運動を意識するとか、「お口を大きくあけてしゃべりましょう」とか先生方はよくおっしゃいますが、本当にお口を大きくあけてしゃべるように気をつけておしゃべりになっていることがおありでしょうか。子どもが本当に先生の言うことを額面通り受けとったら大変なことになります。子どもは幸い、非常なる過

力のようなものもっていますので、先生と適当につき合うことはしませんが、先生のいうこと全部には従いません。「みなさん、お口を大きくあけて話しましょう」と言われても「ハイ」といって次の瞬間からはもう忘れてしまいます。だから大部分順調に育ったのです。本気で一生しゃべる時には大きな口を開かないといけないと思っていたら、おそらく皆さんの大部分もそのようにして教え込まれてきたのですから、今ごろは、大変不思議なしゃべり方をしておられたかもしれません。そういう無意識にしゃべるといふ性質があります。

練習量

それからもう一つは、覚えるまで、何回も何回も繰り返すことによって覚える性質があります。

バイオリンを弾く時の指の動作のように、ドの音を出してみて下さいと言われたら、たいてい一度で出ます。指がそこにあたるのです。また、ほたるの光の歌をうたって下さいと言われれば、パッと一回でその音が出ます。それはピッチを何音上げるとか、一オクターブ下げるとか、皆さんどういうふうにするか一オクターブ下がるのでしょうか。それができない人に聞かれたらどう説明しますか。一オクターブ下げたいけど、どこをどのようにしたらいいのですか。どのあたりをキュッとすればいいのですか。どの程度すればいいのですか。何回やればいいのかとか、もっとはっ

きり教えなさいとか言われたらどうしますか。その時は、きっと「そんなことは——、なんでも声帯から声を出すということは聞いたことはありますが、私はどうも」という人が健全な人です。

やってみて覚える

それを覚えるにあたっては、何回も繰り返してやってみる。それを耳で聞いてみる。ああこれだな、と思った時のそれとない感じ、それを頭へとめておく。おぼえられていく。その時の記憶をたどって「アー」とやるとその音が出る。ところがそれは、最初から一度では決して出ません。何回も何回も練習しているうちにいつのまにかコツがわかるといふかたちで覚える。自転車もそうです。自転車で乗ろうと思つてまたがったら一回で乗れちゃつて、それから普通に乘つているという人は、ないでしょう。普通は自転車に乗ると、どちらに倒れるかという不安もあるし、見当もつかない。乗れる人は、やっているうち、いつのまにか乗れるようになっていく。水泳もそうです。畳の上で何十回授業を聞いても自転車の乗り方の講義を聞いても、一回では無理です。乗れるためには、乗れるようになるまでチャンスを与えてもらつて、実際に自転車を与えてもらつて、練習させてもらつてという時間と回数が必要です。その次には、最初から一回でも失敗しちゃうだめとか倒れたらいけないという状態のもてはできない。決して倒れないでしなさい、倒れたら、自転車をとり上げちゃうという状

態で練習させられますと、なかなか上手になれません。倒れたらこわいという気もちがあまり強いとだめです。幼児よりおとなの方が乗れるようになるのが一般におそいのは、知恵がたりないのも体重のせいでも、運動能力のためでもなく、全部状況が整つていても、失敗することが許されない、失敗したら困る状況のもとにいるからです。そういう技術の習得は、すごく遅れてしまうことがあります。ことばもそういう性質があります。

発達研究

いったい、この不思議な能力を我々は何のように身につけてくるのだろうかということが不思議で、ことばの発達という勉強をはじめたのですが、従来心理学者は子どものことばの発達の研究をしています。その多くは、子どもの口から出たものを数えています。子どもが「パッパ」と言つたら、「パ」と言つたというのを書きとめる。一歳だと平均すると三つぐらいことばをいうとか「マンマ」と「プー」と「バー」と三つ言うとか、それが一歳六ヶ月になると二〇〜三〇ぐらい、二歳になると二〇〇〜三〇〇ぐらい、二歳になると三語文が出てくる、というように子どもの口から出てきたものを数えています。ところが、私は今、職業的には、ことばが順調に育たなかった子どもをお世話することが仕事なので、そういう子どもを見ていると、そこまでいくのが大変だという子がたくさんいます。普通の子がどうしてこんなにたく

さんことばを覚えるのだろうか。どうして世の中の九九%までの人がおとなになるまでにこんなに素晴らしい能力を身につけてしまうのだろうかということが不思議なのです。

二 歳 まで

よく考えていくと、ことばの伸びるのは二歳以後ですが、基礎ができるのは、二歳までだという気がしています。そこで生まれつきの頃から二歳頃までの経過をおつてみますと、教科書にも書いてあることですが、生まれたばかりの時には、赤ちゃんは文字どおり、生まれてはじめてことばを聞くのですから、人のことばが全く理解できませんし、全く日本語で表現することはできません。ところが、お誕生日も近くなりますと、もう赤ちゃんといふのは、日本人なのです。相当たたくさんの日本語がわかるのです。「オバーチャンは」と言うとおばあさんの方を見たり、「電気バ」と言うとき電気の方を見たり、「ア、ババかな」と言うとき関の方を見たり、たいしてしゃべれないけど、わかる日本語はたくさんあります。皆さんは、それほどにはロシア語はわからないでしょう。一歳の赤ちゃんにはおよばないでしょう。一歳の赤ちゃんは相当な実力者です。一〇ヶ月ぐらいから一つ二つことばを使って、おとなを使うこともできます。「オブ、バー、ブー」と言つて、水を持ってこさせたり、人が何かたべていると、「ウマウママ」といって、ともかくもやらなきゃいけないような状況に

なつて、大のおとなが、やむを得ず半分分けてやつたりする。ことばをつかつて、人を動かすということが既にできるようになります。けれども、言っていることは、ほとんど、モガモガだけで、ことばとしては、ほんのちよつと。それが、一歳になり、半年もたつと、いろいろと言うようになります。だんだんことば数が増えていきます。それでも二歳までというのは、ことばは増えてきて、いろいろ言いますが「アチャチャチャチャ」と何か言っているようだなという感じがするけれど、隣のおばさんには、さっぱり通じません。本人は大いに言っている気なのです。

三 歳 児

それが、よその人にも通じるようになるのは、三歳頃です。三歳ぐらいになると、よその子どもにも通じるようになって、ことばを使ってけんかをしたり、お母さんの悪口を言つたりするだけの能力を身につけてきます。そうすると、日本の大学生の英語よりは、実際に役にたつようになります。それまでわずか三年間です。日本の大学生の英語というのは中学三年、高校三年計六年、そして大学の教養二年と六年または八年間学んでいて、それで英語でけんかを売られると、「アーアー」とか言つて、しばらくして「サンキュー」と言つて逃げてきてしまう。「それでことばを習つたのですか」という状態です。

ところが日本の赤ちゃんは、全然学校へは行かない。文部省は

ことばの教育に関して一円の補助金も出さない。それは、明らかに教育なのですから。三年間で、もう人とけんかができるようになりません。幼稚園に行つて、先生に日本語で言われて、その指示を理解できます。たいしたものですね。日本の大学生で、アメリカに行つて、授業に出て、内容がよくわかる人はめつたにいません。

発達 の 条件

幼稚園の子はもうわかるのですから、三年間の学習というのは、たいしたものだと思います。そのように猛烈な勢いで、ことばが出るようになる条件として何が必要かを考えてみましょう。一つは子どもの耳が聞えていること。こちらのいうことが、よく聞えていること。もう一つは、その他の面の発達が普通にいつていること。どうしても、しゃべるのには、口を動かさなければいけません。ものを食べたり、息を吸ったり、飲んだりできるだけの器官の機能がないといけません。中には脳性まひ、口蓋裂のように先天性、その他の理由で、その面の遅れている子がいます。それから一般的な、その他の能力、知能と言つてもいいのかもしれないませんが、まわりのものに興味があることが必要です。中でも特に人間に興味があることが、おもちゃで遊んでいても、母親が来るとホイとおもちゃを投げて、ニヤッとするというように、人間が好きで興味があり、人間とのやりとりが好きで、人間が何かあや

してくれるということが、何よりも好きであるという性質をもっていることが、ことばを覚えるようになるのにぜひ必要です。

教 える 人

そのように、いわゆる身体的に普通に育つて、情緒的にも普通の成長をしている赤ちゃんであることが必要ですが、その上にごく肝腎なことは、母親かだれか、日本語を教えてくれる人がいること。その教え方を中心に、最近、私たちは研究を進めてきたのですが、その教え方というのが非常に傑作です。生まれた時からずっと、ちょっと常識では考えられないようなことが世界中で起こっています。今までそのことにだれもあまり気づかなかつたというのがふしぎですけれども、赤ちゃんというのは最初に申しましたように、生まれた時には全然日本語がわからないのです。聞いてもダメなのです。ちょうどみなさんのホッテントット語と同様、わからないのです。英語などですと最初習い出す前から、アイスクリームとかいろいろな英語をごぞんじだったわけです。赤ちゃんの方は本当にはじめて、しょうしんしょうめいにはじめてすから、生まれて一ヶ月もたたない赤ちゃんに「ホラ、ヨシヨシヨシ」なんていってダメなのです。相手はわからないのですから、にもかかわらず親は言う、それが不思議ですね。

カリキュラム

もう少し教育学的な組織的な知識でも母親が持っていたら、この赤ちゃんは何も知らない今から、「幼稚園へ四年たったら入れなくてはいけない、六年たったら、学齢がまっている。そうしたら日本語で算数でもなんでも教えられるように日本語の基礎学力をそれまでにつけておかななくてははいけない。これに関しては文部省がなんの指導要領も示してくれないし、補助金も出してくれない。教師を派けんしてくれるわけでもない。全部母親がやらなくてははいけない」本当にそう母親がしんげんに考えたとしたらどうなると思いますか。皆さんならどうなさいますか。相手は何をはなしかけてもわからないのですから、ポーンとしています。何も知らないのならばアイウエオのAから始めてみようかと、最初の一週間はAを教えて、次の一週間の午前中は一時間程度Iを教え、午後から応用にうつって「アイ」というのを教えるとします。そういうのはどうですか。カリキュラムは週間予定としてはその程度でどうでしょう。二ヶ月間の言語教育計画としてはどういうことをお考えですか。ここに日本語のわからない一人の人がいます。六歳まででしゃべれるようにしなくてははいけません。どうしたらいいでしょう。中学校で最初に英語を習ったとき「This is a book」だったからあれからやっただけだと思つて「これは本です。これは、コ、コ、コ、わかりますか」というふうにやりましますか。だれもそういうふうにはやらないのです。

母親という先生

どういう理論かわかりませんが、最初から、「オーヨシヨシ」といつてだっこをするのです。「ほらほらパパが帰ってきましたよ」とか、「ああ、おなががすいたのね」「ヨシヨシ」「ちよつと待つてネ」などというふうにです。そんなことを言つても相手には通じないのですが、そういうのです。赤ちゃんもまた、「ちよつとそれはお待ち下さい。私はまだそれを習つていませんから、急に言われてもわかりません。だいたいはやすぎてなんのことも全然わかりません。もう少しゆっくり一音一音くぎつてやっていただけかもしれません。なんていいません。それに皆さんは、切れ目があるように思つていらっしやるかもしれません。」「ホラホラババキマシタヨ」という時には、「ホラ」は一切りで呼びかけ、「ババ」は名詞で区切る「きましたよ」はひとかたまりと、黒板に書いて「ホラ」が呼びかけことば、「ババ」はこのことと父をつれてきて説明してくれば、赤ちゃんでも、わりとよくわかるのじゃないかと思うのですが、そういうことは、一度もしない。「ホラババキタ」という中から、赤ちゃんが「ババ」というのが名詞だと言うのを自分でよく考えて工夫しなさい、解答を探しなさい、というわけなんですけれども、そういう乱暴なやられ方をしてるので、それから三ヶ月ぐらいそれが続きます。

母親のことば

ただ、その時しゃべりかける母親のことばにははっきりした特徴がみられます。「ヒロシチャン、ヒロシチャン、ハイハイ、今いきますよ。ホラホラ、アー、マタ、オシメがぬれているのね」とかなんとか、何しろ、いろいろなことをいうのですから、そしてそのことばがちゃんとした日本語なのです。しかも非常にはっきりした抑揚があります。「オヤ オヤ オヤ オヤパパかな（へへへ）」と音楽みたいです。そしてあまり長くはありませんし、おもしろいことに決して途中で、ためらったり、言い直したりすることは決してしません。「ホラホラ、アノといいますがコノですね。パパといいますが、いわゆるおとうさんがですね、まいりましたということをお伝えしようと、ま、ちょっと思っただけでした」とは決して言いません。まちがおうとなのであろうと、自信満々で、「オヤ、風吹いてきたね、ア、風じゃなかったね」などと途中で言い直したり躊躇したりは決してしないのです。

ことばの学習の中には、ずいぶんおもしろいことがあるのですが、子どもが母国語を学習する時には、発音の誤りは、一回もでてきません。外国語を学習する時には、いつもあるのですが、母国語の中で誤りは聞いたことがないからです。同様に、母親のことばには非常な特徴があつて「ホラホラバー」といっていて、隣の奥さんが訪ねてきて、話しかけると「アーソーですか、実

はね……」とまるでちがう調子で話します。こつち（赤ちゃんの方）をむくと、一つのことを自信ありげに言つて、こちらをむくとへどもどしている。それは別人と思われるぐらいのはっきりした変化ぶりです。しかし、決して、「アイウエオ」の「ア」から順番に「ア」「ア」と言つたりしない。それから、三ヶ月を過ぎると、赤ちゃんの方が「アブアブ」と音を出す。と、母親の方が急に変わる、それがまたみごとな変身ぶりです。今までは、「……ハイ、ハイ」なんていつていたのが、「アブー」とか「バー」とか突如一語文を言い出します。三ヶ月ぐらいの子どもを育てている母親を、正常発達の幼児として比べたら、三歳から四歳の間ぐらいのしゃべり方をしている。それが、三ヶ月過ぎると、母親の方が、一語文のところまで、ストンと、二歳半分ぐらいおりに。「ブー」「バー」「ウーンと言つたの」「ソウ」とか一語文になります。そうするのがよいと考えてからやっているわけではないでしょう。しかし、日本人だけではなく、アメリカ人もそうだという文献が、最近でてきましたからそうだと思います。

拡充模倣

子どもが、「ブー」「バー」といいたすと、急に親が一語文になつて、子どものまねをする。多少、それより日本語に近いような音を出してまねをする。子どもが「マンマ」とか「プ」とか十ヶ月過ぎて、ことばを言う時期がきますと、母親は、そのことばを

混えたもう少し上等なことをいいます。「プー」「プー」というと、「アーオプーほしいの」とか「ハイオプーよ」とかいいいます。これを拡充模倣といえます。

もう少し大きくなって、「プウータンタンタン」と言うと、「アア、ウーカンカンカンカンってあれは、消防自動車だよ」とか、もう少し大きくなると、「ママ、外、消防自動車が走っているよ。プウってきたよ。火事かな」なんていいいますと、そのころになると母親は、「消防自動車よ、また火事ね、だから石油ストープは気をつけなくちゃだめよ」ともう少し先のことを言います。子どもが、そういういさところになると母親は、「うるさいね、だまっていなさい」と言うようになります。

いつでも子どもの少し前に行く。それは、みごとにそうなんです。アメリカ人の計算によると、母親によってちがいますが一年から一年半先だそうです。もう一年した時のあなたの目標はこれです、というサンプルをいくつも示しています。だから、「バア」といったら「プウ」、「アバ」と言えば「バーバ」と言えばいい。子どもが「アタタタ」と言ったら、「ア オッコッチャタネ」と言っていればいい。母親はそうやっています。保母さんは、どうやっているか、幼稚園の先生がどう教えているかは知りません。母親の大部分は、自分の子どもの言語教育にはそうやっています。その言語教育というのは、ともかくも九五%以上、成功しているのです。現在、言語障害という名がついて、この子は、このまま

ではとても世の中においても普通に成長できないという心配のある子どもは五%ぐらいもいないのです。ところが、文部省のようにして英語を教えますと、中学、高校六年を通してどのぐらいしゃべれるかといえますと、ことばを聞いて人の気持がわかるとか、自分の気持が表現できるとかの会話ができるという意味では、六年学習して、五%もいないと内藤元文部次官が書いていました。政府が金を出して、税金を使ってやっている方の言語教育は、しゃべることに關しては、九五%失敗している。けれども、それは依然として行なわれている。九五%以上確実な成果をあげる、明治以来、学校ができる前から行なわれている言語教育は、一円の補助金も受けないで、いまだに定員なしでしている。全部に超過勤務手当が出るわけでないし、全部母親の自主的な努力でやっているのですが、母親は、そんなやり方をしています。

ことばの刺激

そしてその間、母親は子どもに常にことばを聞かせています。聞かせ方が、いつも子どもの能力にあっています。そして非常に独特です。まず、先生、生徒の割合が、1対1で場合によっては先生が祖母、母、兄と三人いてたて続けに出てきて面面相してみせたり、生徒の方は、一人で応対に苦しむほど、先生の数が多いい。それから超過勤務手当は、出ませんけれど、時間割制限がありません。「うちは、ことばの保育時間は午前十時から午後三時

までと致しています」といって三時になると、「それでは時間」と帰る人はいません。夜でも、都合がよければ、言語教育をしてくれる。「イナイイナイバア」とやってくれる。おもしろいことには、そういう言語教育は、いつ行なわれるかというところ、先生の方が、ご機嫌のよい時に行なわれる。とても大事なことです。先生の方が借金で苦しんでいるとか、別にわけがあつて不機嫌な時は、言語教育は、ブンとしておやすみです。

遅れる子ども

もうひとつ子どもの方が、発達が悪い、遅れている場合、いきが悪いといえますか、元気がない、いつも、おっぱい飲んだかと思つて寝てしまう。眼がさめたかと思つて泣いている。また、おっぱい飲んで、眠つてしまう。そういう状態ですと、言語教育は、休講です。自然休講になります。子どもが体の具合が悪くて、むずかっていると、機嫌が悪いとかいう時もお休み。ところが、朝早くても夜遅くても、赤ちゃんが機嫌がよくて、母親もちょうどよくお腹いっぱいだったりすると、延々とくすぐつてみたり、百面相してみたり、いろいろショーをやってくれる。眠くなって生徒が眠つてしまうとそれでお休み。「ホラ、授業中にいねむりする人がいますか」とは決していわれません。一度もおどされることはありません。「いいのかい、そんなこと覚えられなくて。もう三年たつと幼稚園だよ、テストがあるのだよ、その

時、受からなかったらどうするの」といわれたり、「バー」と言つてごらんと言われて日本語を覚えた赤ちゃんはいません。

印象的に聞かせる

この時、先生がしゃべる声は、格段と大きい。赤ちゃんにしてみると、先生は、十倍以上も体重のある巨大な怪獣みたいなものですから、赤ちゃんは、抱きすくめられて、全然動きがとれないような状態で、目の前には奥歯の金歯がきらきら見える距離で、普通の大きき声でしゃべるのです。通常、人間は側へずつと寄つて来て、相手の鼻と自分の鼻がくつつきそうな距離になりますと、あまり大きな声で「あんた」なんて言わないものです。側へいくと小さな声になるものです。相手の数が多かつたり、相手の人との距離が遠かつたりすると、ひとりでに大きくなりますけれど、相手はたった一人なんですから、しかも三〇cm——私たちの計測によりますと母親の口から赤ちゃんの耳までの距離は、十二ヶ月未満の子どもの場合三〇cm——ぐらいのすぐ側で抱いたり、おぶつたりして、すぐ近くにあるのに「ヨシヨシヨシ」とやるからガンとして頭にひびくだろうと思ひます。普通、遠くにいるのと同様のしゃべり方をするし、真正面からするので、つばきが飛んでくる。「イナイイナイバア」をすると赤ちゃんの方からすると、自分の視野一ぱいにお母さんの顔で、なにしろ大きいわけですから、それが大きな口をあいて「イナイイナイバア」と言う

と、——地下鉄などで誰か後の人が「ウーン」とうなると振動が伝わってくるのを、ご存じですか。体がくっついて、相手が声を出しますと、ブーンとひびいてきます。声帯というのは、それだけ威力があるのです。——抱きすくめられて「バー」とやられると、地震みたい、ブルブルとなって、視野いっぱい、母親の顔でつばきが飛んでくるし、奥歯の金歯がきらりとひかたりして、大きな唇が、バクツとなったかと思ったら、「バア」という音が、聞えてくる。普通だったら目をつぶって逃げ出すのではないかと思うのですが、人間の赤ちゃんというのは、ニヤニヤして聞いているのです。父親が帰ってくるたびに、パパとバクバク口が動いたかと思うと、ブルンと響いてきたかと思うと、めがねをかけて、しょぼしょぼかばんを持った人がくるので、ははあ、これと関係があるのかなとうすうす思っているのでしょうか。ものすごく印象的に聞かされるのです。それが六ヶ月から八ヶ月つづく、「ババ」というのはこの人のことかもしれないと思うようになります。

発声を認める

そんな強烈な刺激を与えられ、しかも、一方では、子どもが声を出すと、親は全面的に認めてくれる。それが日本語になっても、いなくても「アアアア」というと、「そういう日本語はありません」とは言わないで、「ウーンソウ、そうなの」と全部、

善意に解釈して日本語らしく解釈して、母親は、日本語しかできませんから、どれか似ている日本語に、多分これのことだろうと解釈するのでしょう。イギリス人の母親なら英語の中で似たのをみつけて、今のはこういうつもりでしたかといっただけで、もう。そういうふうには、日本語らしい調子でほぼ赤ちゃんのやったことをまねします。赤ちゃんは模倣することによって覚えるといいますが、逆に模倣するのは母親の方です。母親の模倣の仕方はへたで、同じようにはできなくて、少し日本語らしい模倣をする。即ち、日本語の方へいくのでしたら、あなたの次のステップはこちらですと教えていることになります。子どもはすぐそこまできます。すると母親は、次のすぐ先のステップを示して、どんな発声、発音も全面的に受け入れた上で、その次のステップを示す。決して拒否、拒絶をしません。いつでも、「ア、ソウ、○○なのね」と受け入れて返します。しかもその時、まともなおとなの日本語ではなく、子どものそれにずっと近い状態のものをしゃべります。次に届きうるようなステップを示すのです。

段階的指導

いわば、アバートの四階から「サア、はやく上がっておいで」とは言わずに、子どもが地上にいるのなら母親の方で降りていって、「四階にいききたいのでしたらこの階段をお昇りなさい。次は二段目、三段目です」と、一步、一步先を行って四階に案内をし

ます。その途中、ころんでも、つまずいても決してそのことにケチをつけません。「歩こうと思って運動を開始したことは結構です」という認め方をします。「アバババババ」「プーといったのおりこうちゃんね」というのです。「アバ」とはなんですか書き現わしようがないではありませんか」とは決していいません。

強制と矯正

そのようなことが、言われ始めるのが幼稚園に近づく年齢で、いつまでもそういう状態が続いていると心配なので、なんとか、直してあげないといけないと思う人が側にいるとその人が、はやく直してあげようとして、いろいろなことを始めるのです。するとその人が、言語障害を持っている子どもに対して少しでもよくしてあげようと思って、することというのが、通常どういうことかという、自分が中学の時英語を習った時やられたようなこと、即ち、宿題を出して「勉強してきたか、やってみなさい。先生おはようございます」と言ってみなさい。「テンテオアヨゴダマス」じゃないでしょ。「ゴダマス」じゃないの、あんた今、「ゴダマス」と言ったよ、「ゴダマス」じゃないの、「ゴザイマス」と言うの」と、もっともらしく、その音を強く発音して聞かせることと、子どものまちがっている発音をそのまま繰り返して聞かせ「おまえは、今、こういういい方をしたのだぞ」と思いしらせて、劣等感を抱かせる方法、そんなことを親もやりがちです。

そういうことをやりますと、どういうことになるかといいますが、ことばを覚えるのに都合の悪い状態、即ち、ピンチに追い込んでおいて、失敗を許されない状態にあって、正しくやった時しかほめられない状態で練習させられる。そうなるとうまくできません。逆にその状況に追い込まれてしまう。そうすると、そこから、うまく伸びなくなってしまう。

遅れた子の指導

ですから、もしことばがひどく遅れているとか、発音が、おかしい子どもがいて、本日ただ今の瞬間は、そうしかできないのだら、それを全面的に受け入れて、「ソウ、コイノポリ作ったの、ヨカッタネ」と言ってあげること。「アボ(ク)ネコ(イ)ノボ(リ)ツ(ク)タノ」といった時、「ア、ソ、コイノポリ作ったの、よかったね」と言ってくれる先生がいれば、「また言おうかな」という気になりますし、一回言わせてもらおうと、言う練習のチャンスが与えられるのです。ことばというのは、自転車といっしょで、しゃべってみる以外にしゃべるのを上手にする方法はありません。畳の上で訓練することによって水泳ができないのと同様に、しゃべる機会をいっぱい与えてもらえないかぎり上手にはなりません。「ちゃんとしゃべらなさいとだめです」と言われたら、子どもの方は、それで、完全にアウトです。「どんなしゃべり方でも結構です。しゃべったら、それは認めます。そして次

のステップは、「ここにいきましよう」という、子どものことをわかってくれて、しゃべるチャンスを与えてくれる、たくさんしゃべられる先生はありがたい先生なのです。今、日本語がしゃべれる皆さんだって、赤ちゃんの時、ちょうど、そういう扱いをしてくれた母親が誰かいたわけなんです。

遅れた子と幼稚園

たまたま、そういうことが必要な子どもが入ってくると、今の日本の幼稚園では、「まだお話もできませんから、ご返事も十分にできないから、幼稚園に来て、無駄です」と言うのです。そして「来るな」というのです。しかし、その子は家にいたら、おそらくもっと悪い環境におかれるのです。幼稚園に行くとき、幼稚園のほかの子どもたちは、からかったり、バカにしたりすることもあるかもしれませんが、しかし本気で心配はしません。「この子、大丈夫かな、こんんで先生、これで大丈夫？ 小学校へ入れるかな？」といって本気になって心配して気をもんで夜も眠れない子はあまりいません。「ウエエア」と言った子がいると、「なに、えー」と聞き返してくれます。もう一回言って「先生わからないよ、何か言っているよ」と言ったら先生が聞いて、「ア、ソー」とそこで通じたりすれば、言わせてもらう機会が多くなるし、ともかくも幼稚園にいくと格段と通常進歩します。入れてもらうと、ほかに普通にしゃべれている子どもにも、弊害があると

か、どもりの子どもを入れると、他の子までどもりになるとか、そういうことは、事実上、全くないのです。いろいろな迷信がありまして、言語障害の子どもを入れると、他の子どもにも迷惑になるのではないとか、本人が劣等感を持つに違いないと思っている人がいます。そういう指導をしているのかどうか知りませんが、多少とも違った子どもが入ってくると、その子が劣等感を持つような教育をしているとは思われないような先生が、そういうふうに言っていて、その子どもたちが入園するのを断っています。

チャンスを与えてください

でもただ「ア」としか言えなかったら、「ご返事する時は、皆「ハイ」というけれど、〇〇ちゃんは「ア」って言えるから「ア」というのを返事として認めることにしましょう。という態度を先生がとってくれば、その子は、喜んで「ア」と言うでしょう。そして十回、二十回とやっていたら、「ハイ」と言えるようになるかとなってきて、半年ぐらいしたら「ハイ」と言えるようになるかもしれません。問題は、チャンスを与えるか与えないかです。チャンスを与えてやれば、その分だけ通常は、その子は得をします。「この子を幼稚園に入れてくれないかな、どこか」と思っていて、あちこちの先生にたのむのですが、どこでもだめだということ、わたしたちは毎日経験しているわけです。

(幼稚園教育実践指導研究会講演より)